神戸異人館事件帖

夏の海の水葬

陳舜臣

陳舜臣

神戸異人館事件帖

夏の海の水葬

実業之日本社

夏の海の水葬

昭和五十四年七月二十五日　初版発行

著　者　陳　舜　臣

発行者　増田義和

発行所　実業之日本社
本社　東京都中央区銀座一―三―九
電話　〇三（五六二）四三一一
振替　東京一―三二六　〒一〇四
支局　大阪市北区曾根崎二―十二―七
梅田第一ビル内
電話　〇六（三一二）一五七三

印刷所　大日本印刷

製本所　共　文　堂

乱丁、落丁の場合はお取り替えいたします

© S. Tin　0093―505040―3214

■目次

知らぬまに死体が　5
ひょうたん男　29
消えて消されて　53
ひんやりしたキス　77
夏の海の水葬　101
牛肉とダイヤモンド　125
たのしい同居人　147
にせもの天才　171
はなやかな闇　195
一応の終わり　217

装幀／長尾みのる

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

夏の海の水葬

——神戸異人館事件帖——

知らぬまに死体が

1

「そら、きまってまンがな、戦争のあとで戦争のまえですわ」

と、沖源（オキゲン）さんは顎を撫でながら答える。

——いつがいちばん暮らしやすかったか？

というのがこちらの質問である。

「戦争のあと、戦争のまえ？」

判じものめいた答えに、こちらが首をかしげてそう問い返すと、

「満洲事変のあと、支那事変のまえですがな」

と、オキゲンさんはちょっといらだたしげな表情で答える。自分の用語が、相手に通じないのがもどかしいのであろう。

一九三一年（昭和六年）から一九四五年（昭和二十年）まで、すなわち柳条溝で満洲事変が勃発してから、太平洋戦争なるものが終了するまで、「十五年戦争」と名づける歴史学者がいる。たしかに十五年間の戦争であったが、政治意識のあまり高くない庶民の感覚では、そのあいだ三、四年ほど休憩の時期があったような気がする。

オキゲンさんこと沖田源太郎老は、彼の一生でもっとも暮らしやすかったのは、まさにその中休みの時期であったという。

「そや、そや、あのころがよかった。商売も繁昌したもんやで」

ヤンさんは相槌をうってから、こんどは手にした駒を、思いきりよくパチンと将棋盤にうちこんだ。

「王手飛車！」

「や、や……やられたがな。そんなもン、むちゃくちゃ……」

オキゲンさんは情けない顔をして、もういちど将棋盤を眺め渡した。

「えらい未練やな」

と、ヤンさんはひやかす。

ほとんど毎朝のように、こんな場面が見られた。ここは神戸の裏山の一隅——再度山の谷道ぞいの小さな茶店のなかである。まだ寒いので店のなかにいるが、陽気になると、店のそとに出て、対戦ということになる。

ちょうど良い勝負らしく、勝ち誇るのはいつもヤンさんとは限らない。オキゲンさんが手のひらで駒を弄びながら、気持よさそうに相手を見下ろしているときもあった。

「好敵手ですね」

あるとき、私がそう言うと、オキゲンさんはさりげなく、

「そらそうや。もうこの人とは五十年近くも将棋さしてまンねや」

と言った。

「五十年も？」

「五十年にはちょっと足りんわな。……四十年以上はあるやろ。いっしょの家に住んでたンや。上と下にな。この人に将棋教えたン、この私ですがな」

オキゲンさんはそう言って、眉を上下させた。

この再度山の谷道が、毎朝登山の市民で賑わうのは、六時から七時ごろまでである。茶店のそばの広場でのラジオ体操は、六時十七分から始まるが、ずいぶんおおぜいの人が集まる。職業柄、私が朝の散歩にこの茶店へ出かけるのは八時をだいぶ過ぎてからのことが多い。そのころは、もう人もまばらで、それもお年寄りばかりということになる。

オキゲンさんやヤンさんとは、私は山で知り合った。ヤンさんは私とおなじ中国人だが、彼の本名が楊天平であり、江蘇の人であるということなどは、顔見知りになって、かなりたってから知ったのである。

二人ともまだ七十になっていないという。だが、七十にきわめて近い六十代であろう。おそらく六十八、九といったところかと思われる。

それから逆算すると、いちばん良かったという時代は、彼らの二十代の半ばのころであったことになる。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.cc

いろんな世間話をしているうちに、オキゲンさんは若いころ、外国商館に勤めていたことがわかった。彼だけではなく、彼の父親も外国商館の番頭であったそうだ。

ヤンさんの仕事は、華僑なら誰でも知っている。腕のよいコックさんである。たいていのコックが、料理店の厨房出身なのに、彼は外国航路の船のコック部屋出身であった。出身が異色であるばかりでなく、西洋料理もできるという特技の持ち主として知られていた。

「いっしょの家ゆうて、どのへんに住んでたンですか？」

二人の老人が将棋に飽きたとおもわれたころ、私はそう訊いてみた。

「空襲で焼けてしもたけど、ヒルサイド・ホテルゆうの、おぼえてませんか？」

と、オキゲンさんは説明した。

「ああ、ありましたな。ながいこと焼け跡のままになってた、あの……」

「そうそう、高い煉瓦の煙突が、執念深うのこってたね。いつ崩れるかわからんよって、近所の母親は子供らに、近づいたらあかんでゆうて、やかましィ言いきかせてたもンや。……そのヒルサイド・ホテルの横に路地があって、そこちょっとはいった、ちっちゃな木造の洋館や」

「異人館でンな」

「そんな大層なもンやない。おんぼろの、がたぴしの……」

オキゲンさんは、もっと悪いことばをさがそうとして、茶店の天井を見上げた。

「ぼろぼろやったけど、私らがはいるとき、外のペンキだけは塗り直してくれましたな。はいったころ、そのペンキのにおいが強うて、かないまへんでしたわ」

そばからヤンさんが補充説明をした。

「そやけど、ペンキくさいなんて言うとられなかったで。……はいった早々、あんなことがあったよって」

と、オキゲンさんはヤンさんをたしなめるように言

った。
「ほんまやな。びっくりしてしもたわ。知らん女が勝手に死んでたンやから」
ヤンさんはそう言って首を縮めた。
「勝手に死んだ？　女のひとが？」
おそらく私の目はキラと光ったにちがいない。

2

私は二人の老人にねだって、その事件の話をしてもらった。老人にありがちのことだが、話はよく脱線したり、枝葉がひろがりすぎたりしたが、それは適当に刈り込んでおくことにしよう。
時代は彼らがいちばん良かったと考えている一九三三年である。日本の元号では、昭和八年にあたる。前の年に、日本のかいらいの『満洲国』が生まれて、いわゆる満洲事変も一段落していた。日本軍はまだ熱河あたりを攻めていたが、大きな作戦はなかった。たしかに、戦争の中休みといった時期である。
ヤンさんは二年まえに、上海航路の船をやめて、神戸の杏花楼という料理店のコックとなっていた。杏花楼は同郷の人が経営していたのである。
ところが、杏花楼は廃業することになった。店主の父親が上海で亡くなったので、上海の店を継がねばならなくなったのだ。そんなわけで、ヤンさんは失業した。
――また船のコックに逆戻りするか。……ヤンさんはそう思って、杏花楼のお客であったエルウィン商会へ相談に行った。
エルウィン商会はイギリス系の商事会社で、神戸支店はいくつかのイギリス系汽船会社の代理店をしている。そこへ行けば、コックに欠員のある船を紹介してもらえると思ったのである。
沖田源太郎はエルウィン商会に勤めていた。そして、ときどき杏花楼へも食べに行ったので、ヤンさんとはちょっとしたなじみだった。

「船に乗るよりは、独立したらどうだい？」
若き日のオキゲンさんはヤンさんにそう助言したという。
「金がない」
と、ヤンさん。
「金がなかっても、腕があるやろ。コックの腕が」
オキゲンさんはヤンさんの肩を叩いた。じつは彼はアテがあったのだ。在留外人がちょっとしたパーティーをひらくとき、いつも頼んでいた中国人のコックが、年を取ったので引退することになっていた。そのあと釜はまだみつかっていない。
「どや、やってみんかいな？」
と、オキゲンさんはその話をもち出した。
「出張料理だけでやって行けるやろか？」
「やって行けるで。張のおっさん、悠々とやってたもンな」
「月に何回注文あるやろか？」
ヤンさんは慎重であった。
「そんな心配せんでもええ。ヒルサイド・ホテルだけで二百五十円くれる。ほかをあわせて三百円から四百円はカタイ。どないや？」
オキゲンさんは具体的に説明した。
ヒルサイド・ホテルは、当時の神戸では中規模のホテルであった。宿泊客だけではなく、ちょっとした宴会もひらかれる。料理がうまいという評判だったのである。ホテルには専属の初老の日本人コックと助手とがいたが、宴会になると、こんど引退する張という老コックに応援を頼む。ホテルの料理の評判は、じつは張の腕によるものだった。
「張さんは貫禄があるけど、私なんかあかんで、まだ若いよって。ホテルのコックとうまいこと行かんやろ」
そんな人間関係を考えると、ヤンさんは気が進まなかった。
「大丈夫やて。……ホテルのコックはな、ほんまは日本料理の板前で、せいぜいテンプラまでや。西洋料理

はカレーライスぐらいまでで、それ以上はにが手なんや。そのおっさんが、早よ応援コックみつけてくれゆうて、えらい催促しよるんやから」
「そうか。……」
ヤンさんは、気持がうごいた。海の上より、やっぱり陸の上のほうが良い。それに、彼は神戸が気に入っていた。ここに住めるなら、それに越したことはないのだ。
「やれる、やれる。ヤンさんの腕は、わしらよう知っとるもンな」
と、オキゲンさんは請け合った。
「二年ほど、国の料理に変えたから……西洋料理に戻れるかな?」
「大丈夫！　料理はおんなじや」
沖源さんは力をこめて言った。
(えらい力を入れてくれる。……)
ヤンさんは、ちょっとおかしいと思った。肩入れが度をすぎているようなのだ。あとでわかったことだが、じつはオキゲンさんには魂胆があったのである。
張さんは老夫婦で、ヒルサイド・ホテルの横の路地のボロ洋館に住んでいたが、引退後、横浜の息子のところへ行くことになった。その洋館は、じつはエルウィン商会の持ち家だったのである。さらにいえば、ヒルサイド・ホテルの筆頭株主もエルウィン商会であった。
ボロとはいえ、洋館は洋館であるし、ゆったりとした間取りであった。張さんは夫婦だけでなく、親戚縁者など五、六人を住まわせていたが、それでもまだひろかった。オンボロとは外面のことで、ペンキが剝げているからにすぎない。
横浜へ行く張さんは、とうぜんそこから出て行く。後任者がはいるのだが、それがヤンさんのような独身者であればひろすぎる。
——じゃ、私もはいります。一階と二階に別々に住めますから。
オキゲンはエルウィンの支配人にそう言って、まんまとその洋館にはいりこんだのである。しかも、ペン

キの塗りかえまでさせた。そればかりではない。二人の独身男の同居には、食事という難問があるが、そのうちの一人がコックであれば、その問題も解決される。それも、コックでないほうの人間に有利な条件で解決されるのだ。

オキゲンさんは、あんがい食事のことから、この方法をえらんだのかもしれない。私はオキゲンさんとつき合いを深めるようになってからは、彼はたいへんな美食家であることを知った。美食家は、おいしいものを食べるためなら、どんなことでもするのだ。

それはともあれ、オキゲンさんのすすめで、ヤンさんはその話に乗ることになった。そして、だいたいオキゲンさんの書いた筋書どおりにことは進行したのである。

その当時のエルウィン商会神戸支店支配人は、ギルバートという人物であった。カルカッタの支配人から転勤してきた人で、着任してまだ一年になっていなかった。日本語もそれほど巧みではない。沖田源太郎はオフィスの人たちから、オキゲンさんという略称で呼ばれていたが、ギルバート氏はいくら教えられても、オキゲンという発音はできなかったのである。

——ゴキゲン

と発音する。頭の母音のOが出ない。そのまえにG音がはいって、GOになってしまう。そして、それを正しいと思いこんでいたのである。

オキゲンさんがヤンさんといっしょに、そのボロ洋館にはいるとき、マネージャーのギルバート氏は、

——では、プレートをプレゼントしよう。

と言って、真鍮のプレゼントを贈った。門標である。それには、

GOKIGEN HOUSE

と大書されていた。

「まちがっているんだから、訂正してもらえよ」

オキゲンさんは同僚にそう言われたが、しばらく考えてから、

「ま、ええがな。おんなじまちがわれるんでも、ど機

嫌さんゆうのは、そない悪いことないんやから」
と答えた。
それ以来、二人が同居したそのオンボロ洋館は、「ゴキゲン・ハウス」と呼ばれるようになった。

3

その年の三月のはじめのことだった。その日、ヤンさんは、ヒルサイド・ホテルで、おひるの宴会があり、あと片づけをして、ゴキゲン・ハウスに戻ったのは、午後二時半ごろであった。
ゴキゲン・ハウスの階下にヤンさんが、そして階上にオキゲンさんが住んでいた。ヤンさんは自分のねぐらに戻って、
「やれ、やれ、ひる寝でもするか。……」
と、ベッドに近づきながら上衣を脱いだ。そして、脱いだ上衣をベッドのうえに投げようとして、その手を途中でとめた。上衣は床のうえに落ちた。——
「あ、あ、あ……」
ことばにならぬ声をあげて、彼は蒼ざめた。
起き抜けに、蒲団をはねのけて、ヒルサイド・ホテルへ出かけたのである。だが、いま見ると、無人のはずのベッドに、何者かが寝ているのだ。ちゃんと蒲団をかぶって。これは、いったいどういうことなのか？枕のところに、長い髪が見えた。
（女だ。……）
見知らぬ女が、自分のベッドで横になっている。そこへ自分が行く。妙な言いがかりをつけられるのではあるまいか？　ヤンさんは、はじめそんなふうに用心したという。彼はなかなか慎重な人間である。
だが、すぐに思い直した。
（わしがいまのいままで、ヒルサイド・ホテルの厨房にいたことは、おおぜいの人が知っている。理に合わない言いがかりをおそれるいわれはない）
考えてみれば、ヤンさんも沖源さんも、そのころは気らくな独身者である。沖源さんは二階の部屋のドア

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com